

スポーツ産業論

女子サッカーの行方

01 / 1 / 26

商学部 2年 1199113M 佐藤聡一
商学部 2年 1199140C 瀬戸康弘
社会学部 2年 4199099K 酒井 淳

目次

テーマ設定～作業日程	P 2～3
女子サッカーの歴史と現状	P 4～5
男子と女子との比較	P 5～6
盛り上げ案	P 6～8
女子サッカーの構造変化	P 8～9
インタビュー	P 10～11
コメント	P 12～14
感想・評価	P 14～16

経緯

● テーマ設定の理由

現在、私たちは様々なスポーツに接する機会がある。しかし、個人スポーツか集団スポーツかということやボディーコンタクトが激しいか否かといったことのスポーツ自身の特性、またそういった特性と大いに関連のある競技者の性別、さらにグラウンドや用具などのスポーツをする環境などにより、その機会も大きく制約されている。そういった現状を考えると、個々のスポーツ間において支持する層が違ってくることが、また、各々のスポーツ間における人気に差異が生じていることも当然であろう。しかし、その差は何らかの策を講じることで縮めることができ、現在は人気のないスポーツであっても盛り上げることが可能なはずである。そこで、私たちのグループではそのような考えを念頭におき、まず、ある特定のスポーツにおける男女間の差異に着目することにした。次の段階として、どのスポーツを取り上げるのかを考え、サッカーをテーマにすることにした。なぜ「サッカー」がテーマとしてふさわしいと考えたかということ、日本において他のスポーツと比べた場合、男女間における格差が顕著であると言えるからである。具体的に言うと、現在、男子サッカーはプロリーグであるJリーグが誕生し着々と発展し幅広い層に人気がある。それに対して、女子サッカーは名称は「Lリーグ」と呼ばれているが、プロリーグではなく、アマチュアリーグのトップリーグという位置づけであり、競技人口もまだ少ない。こういった現状を踏まえて、男子サッカーとの比較を行いながら、女子サッカーにおける問題点を挙

げ、効果的な改善策を提示していきたいと思う。ここで、最終的な提案に関することについて言及しておきたいのだが、私たちのチームでは当初プロ化による女子サッカー界の活性化を試みてはどうか、と考えていたが、インタビューによってLリーグが現段階でプロ化を目指していないということや、Lリーグのみならず女子サッカー自体があまり盛んではないという厳しい現状を見た場合に、プロ化して盛り上げるという手段ではなく、いかにして競技人口を増やし女子サッカーをスポーツとして盛り上げるかということに重点を置いた。

● 作業分担

担当

書記・記録	佐藤
Lリーグ観戦	瀬戸・酒井
インタビュー	全員

レポート作成

女子サッカーの歴史と現状	酒井
男子と女子との比較	酒井
盛り上げ案	瀬戸
女子サッカーの構造変化	瀬戸
インタビュー	佐藤
コメント	佐藤・瀬戸
編集	佐藤

● 作業日程

- ・ テーマ設定及び討論 10月～11月
- ・ Lリーグ観戦（YKK-W対伊賀FC / ベレーザ-W対田崎）
12月9日@西が丘サッカー場
- ・ サッカー協会Lリーグ関係者へのインタビュー 1月9日
- ・ 討論及びまとめ
- ・ 最終報告及びレポート

レポート内容

テーマ設定理由でも述べたように、いかにして競技人口を増やし、女子サッカーを盛り上げていくかという最終目標を達成するために以下の4つのプロセスを経て検討していきたいと思う。

女子サッカーの歴史と現状

男子と女子との比較

盛り上げ案

女子サッカーの構造変化

女子サッカーの歴史と現状

女子サッカーに限らずどのようなことにおいても現状の認識を深めるためには、その歴史を調べることは必要であり非常に有効なことである。まずは日本女子サッカーの歩みを見てみたいと思う。

日本女子サッカーの歩み	
1979年	日本女子サッカー連盟設立 (財)日本サッカー協会第5種登録開始
1980年3月	第1回全日本女子サッカー選手権大会(連盟・日本F Aとの共催) [8人制、試合時間50分、4号ボール使用]
1982年	第3回全日本女子サッカー選手権大会 [11人制に変わる]
1986年8月	5号ボール使用
1989年3月	女子連盟を発展的に解散し、日本サッカー協会に第5種委員会が発足した。
9月	第1回日本女子リーグが6チームでスタート (清水F C、鈴与清水、読売、新光精工、日産、プリマ)
1991年	第1回F I F A女子ワールドカップ出場
1992年3月	第1回全日本少女大会
12月	第1回全日本大学大会
1993年4月	登録種別を年齢別にわけるとも考えられる。人数が11人集まりきらない、集まったとしても体力がもたない、技術がまだ伴っていない、などである。当時のこうした状況だったので、前述したルールが適用されていた。また、競技人口の方はというと別紙のグラフを参照してみると、加盟登録選手、加盟登録団体ともに緩やかに増えている。また、90年代前半は日本女子サッカー
	(5 - 1種、5 - 2種、5 - 3種、5 - 4種、5 - 5種)
1995年	第2回F I F A女子ワールドカップ出場
1996年	アトランタ五輪出場
1999年	第3回F I F A女子ワールドカップ出場

上記のように、1979年の日本女子サッカー連盟設立以降、女子サッカーは非常にゆっくりとではあるが、発達していくわけだが、最初の全国大会では男子とは異なった、8人制・試合時間50分・4号ボール使用、というルールが適用されていた。これは当時の状況をあらわしているとも考えられる。人数が11人集まりきらない、集まったとしても体力がもたない、技術がまだ伴っていない、などである。当時のこうした状況だったので、前述したルールが適用されていた。また、競技人口の方はというと別紙のグラフを参照してみると、加盟登録選手、加盟登録団体ともに緩やかに増えている。また、90年代前半は日本女子サッカー

ーリーグでも外国人選手が活躍したり、代表チームは世界大会に出場したりと、女子サッカーリーグも活気があった。

しかし、女子サッカーの現状は近年厳しくなっている。スポンサー離れが深刻で、過去に「名門チーム」といわれたチームも少数を除いて廃部になってしまっている。たとえば日産FCレディースや日興証券女子サッカー部などは、廃部になっている。Lリーグの「伊賀FCくノ一」はつい最近まで「プリマFCくノ一」として活動していたのだが、親会社のプリマハムに見切られて廃部の危機に瀕していたときに、地元の人たちのサポートにより存続できたという例がある。ただ、これは例外的なものであった。チームの存続だけではなく、さらには、現在では「Lリーグ」と呼ばれている女子サッカーリーグは存続さえ危ぶまれている。また、前述したように、ゆっくりと着実に増えているように見える競技人口だが、実はそこに女子サッカーの発展を阻害する大きな問題がある。それは女子サッカーの年齢別競技人口構成比の問題である。サッカー協会Lリーグ関係者から聞いた話で、「一般に小学校での（サッカー）経験者の多くは中学校でやめてしまい、高校からまた他の未経験者が新たに始める。また、女子サッカー先進国であるアメリカでは、30代の女性でもサッカーを続けている人がいるというのに、日本では20代前半、長くても20代後半になってしまうとやめてしまう人が大多数である」とのことであった。このように女子サッカーは現在問題が多いと言える。これらの問題に対しての提案は以下の「盛り上げ案」と「女子サッカーの構造変化」のところで述べようと思う。

男子と女子との比較

「女子サッカーの歴史と現状」で、ある程度女子サッカーの問題点などが挙げられたが、さらに、男子サッカーと比較することで、男女の格差は実際どの程度なのか、また、その格差の原因は何なのか、という観点から女子サッカーを分析していきたいと思う。以下、男女のデータを比較し検討していく。

女子		男子
23443	競技人口	869261
1217	チーム数	27456
約3000万円	リーグの収入	約75億円
約1500万円	1チームの予算	約20億円
16340	リーグの観客動員（総数）	2797945
283	リーグの観客動員（1試合平均）	11658
6649	カップ戦の観客動員（総数）	368560
416	カップ戦の観客動員（1試合平均）	7522

当然のことであるが、全てにおいて男子の方が多くなっている。サッカーという文化が男子の方では根付いているが、女子のほうではまだ根付いていないといえるだろう。そもそも女子の競技人口が少ない原因として挙げられるのは、サッカーのスポーツの特性にある。「サッカーは格闘技」と称されることがあるくらい激しいボディコンタクトのあるスポーツであり、その結果、ケガの絶えないスポーツでもある。だから、一般的に、サッカーは男性のやるスポーツとのイメージが強く、女性はサッカーを見ることはあっても、なかなか実際にやることは少ない。また、競技人口が少なければ、競技レベルもなかなか上がらない。そうすると、試合ないように面白みが欠けてしまい、観客の足も遠のいてしまうのである。さらにサッカー協会のLリーグ関係者の方の話や実際の試合を見て、Lリーグの場合女性の観客が極端に少ないのは事実である。というのも、Lリーグの観戦にくる人達は、大まかに分類すると、選手の身内・他のLリーグのチームの関係者・サッカーをやっている女性・男女両方のサッカーに興味のある男性、の4つにわかれる。このうち、最初の2つが観客の大半を占めている。

以上のことをまとめてみると、サッカーにはいろいろな要素の問題が存在し、それらが連鎖することで女子サッカーの発展を阻害する悪循環へと陥っている。それらを改善すべく、「盛り上げ案」「女子サッカー界の構造変化」で効果的な提案をしていきたいと思う。

盛り上げ案

() Jリーグとのリンク

現在Lリーグでは広告費、運営費に十分な資金を投入できていない。とくに広告費はほぼ0であり、また、TVを中心とするメディアにも登場することがないので、一般的な知名度はかなり低いものとなっている。女子サッカーのトップリーグの認知度が低いということは、女子サッカーの底上げに対し悪影響である。そこでスポンサーを見付けることにより潤沢な資金を得て、それを活用することが第一に考えられるが、Lリーグの各チームが簡単にスポンサーを得られるほど、今日の日本経済は余裕があるとは考えづらい。そこで、できるだけ資金をかけずに、Lリーグを盛り上げていくために、Jリーグとのコミットメントを強くして運営していくことを勧める。現在LリーグはJリーグ関わらずに運営をしているが、観客数は200人前後である。そこで、たとえば、Lリーグの試合はJリーグの前座で行なう、とすればJリーグの試合を見にきた数千人の目に

触れることになり、サッカー好きの人達に女子サッカーの魅力を知ってもらえることになるだろう。また、広告や球場などの施設にかかる費用も削減できることが期待できる。このことはJリーグとLリーグのリンクだけではなく、日本代表の試合についても同じことが言える。たとえば、日本対韓国の試合の前に女子の同カードの試合をもってくれば、自然と女子代表にも応援の熱が入るだろうし、メディアにも取り上げられやすくなるという効果も出てくると考えられる。

() ルールの変更

女子サッカーを取り巻く最大の問題は競技人口の確保である。競技人口をいかに増やすかということに関しては、「女子サッカー界の構造変化」で述べることにして、ここでは女子サッカーの魅力を高めるにはどうするかということを中心に考えてみる。そこで考えられるのはルールの変更である。現在は男性と全く同じ環境で行なわれているが、前述のように男子と比べて圧倒的な競技人口の格差や、男性と同じレベルの身体能力を保つためには女性は男性よりもハードなトレーニングが要求されるということがある。(参照 <http://www2.tokai.or.jp/Fuku/sotsuron.html> 「第2節 女子サッカー選手の抱える問題 第2項 男女の身体的差異」) このような現状を踏まえ、より試合の魅力を高めるということを目標にすると男性と同じルールでなければならないということに固執する必要もないであろう。具体的な改善案としては、

(1) 交代人員の増員

(2) 激しいチャージの禁止

(3) フィールドプレイヤーの人数削減

が挙げられる。まず(1)を説明しようと思う。現在試合中に交代できる人数は男子と同じく3人である。これを5～6人に増やそうというアイデアである。また、現在交代したプレイヤーは再びフィールドに戻ることはできないが、女子サッカーにおいては認めるようにする。男子はシステムの変化は後半の残り数分でしか見られないが、このルールを採用することで試合中にとりうる戦略の幅が広がり、知的な面白さがますますであろう。またLリーグにおける女子サッカー選手は選手寿命が男子より7～8年短く、その結果、各チームには経験の浅い若手の選手が数多い。この若手選手に経験をつませ、魅力のあるプレーをしてもらうには、やはり、試合に出場しやすい環境を作る必要がある。そこで、前述したとおり、交代人員を増やし、また、1回アウトした主力選手も再び戻せるようにするこ

とで、若手にチャンスを与えやすくなると考えられる。次に(2)の激しいチャージの禁止の説明をしようと思う。現在の男子サッカーは放映権料の問題などで、見せるチームづくりよりも、確実に勝利し収益をあげるチームづくりが主流となっている。男子サッカーはそのほとんどがプロであるため、ビジネスにこだわるのはしょうがない、という考えもあるが、多くのサッカーファンが魅せるサッカーを望んでいるのもまた事実である。そこで、女子サッカーにおいては、つぶしあいではつまらない試合を起こしやすくなる激しいボディチャージを禁止することを提案する。これによりサッカーの魅力である技術的な美しいプレーが勝利することにつながってくるという良い影響が出てくるであろう。(3)に関してはさまざまな意見があるが、11人集めるのが困難である現在の状態を考慮するならば、プレイヤーの人数を少なくすることを考えてもよいと思う。バレー界では6人制と9人制の2つの制度を設けているが、それと同様に2つの制度がサッカー界でも認められてよいだろう。だが、これはあくまで11人制を主とした上での考えであり、女子サッカーが盛り上がり、人数の不足に困ることがなくなれば、元に戻すという段階的なものである。

女子サッカー界の構造変化

() 中学校におけるサッカー環境の充実化

女子サッカーの競技人口維持に対し、大きな阻害要因が存在している。それが、中学校における環境である。性格なデータは得ることができなかったが、文献(『サッカーの話をしよう』(P195より)(NECクリエイティブ社、著者：大住良之)(http://www.jws.or.jp/jpn/library/soccer/lib_info_soccer02.html)から得られた情報によると、小学生の段階では女子でサッカーをする数は多いようである。その大部分は男子と同じチームに所属し、男女混合で試合を行っている。しかし、彼女らが中学生になったときに環境は一変する。それは、中学校において、サッカー部は男子のものとなってしまっており、女子はマネージャーをやるか、ほかのバスケットボールやバレーボールなどのスポーツに変更するか、いずれにせよ、部活動においてサッカーを直接プレーをする機会を失うのである。つまり、女子の場合、中学生の時期に競技者が大幅に減少してしまっているのである。たしかに、熱心な選手はクラブチームに入るが、数は少なく、男子と比べて環境面での不利益は大きい。競技人口の増加は認知度の向上や競技レベルの向上につながる

ので、この問題は解決しなければならない。では、具体的な解決案を述べてみようと思う。まず、考えられるのは小学校の続きで男子と混合でプレーをするということがあげられるが、身体的な能力差を考えると、中学時においては身体接触などでけがをする危険が大きくなると考えられる。第二の案としては女子サッカー部を作ることが考えられるが、日本の中学校は、野球部・男子サッカー部・陸上部などが同じグラウンドを使い、現在でも飽和状態で使えるスペースがないので、さらに女子サッカー部を作るといことは、物理的に無理が生じると考えられる。そこで提案したいのは、フットサル部を作ることである。フットサルであれば、人数がある程度少なくともプレーできるし、場所を広くとることもない。ポディージャージはサッカーよりも少ないので、危険もその分少ない。また、サッカーをすることによって日に焼けることを嫌う人も多いが、フットサルであれば体育館でも行えるというのも魅力の一つである。サッカー大国ブラジルでは多くの人がこのフットサル形式のミニゲームをしている。この手軽さが、サッカー大国の豊富な人材を育成していると考えられるから、フットサルを利用することで、競技人口を確保できたならば、高校・大学・社会人と段階的に続くピラミッド構造が作れるはずである。

() 中高年のサッカー環境

Lリーグの選手を見ると主力選手は10代後半から20代前半である。世界最大の女子サッカー国であるアメリカでは、30代の選手多い(http://www.jws.or.jp/jpn/library/soccer/lib_info_soccer01.html)ことと比較して、日本においては選手生命はずいぶん短い。これは女子に対する社会的な制約が大きいと考えられる。これはサッカー界だけに限ったことではなく、日本の社会的構造における女性問題と広く捉えることもできる。が、このレポートにおいては、女子サッカーの視点から問題点を挙げたいと思う。まず、託児所が未整備(http://www.jws.or.jp/jpn/library/soccer/lib_info_soccer01.html)であること。また、使用するグラウンドが公営の場合(河川敷など)では更衣室が整備されていないことなどが問題としてあげられる。前者においては、Lリーグの選手の場合、結婚後は引退してしまうという現状、また、子供を産んだ後でも、育児に時間がかかるなどで、サッカーを続けられない現状を考えたときに、必要だと思う。後者に関しては、プレーをする服装に着替える場所はやはり必要だと考えられる。こうした設備的な不足に対する整備も必要だが、社会環境的な整備、つま

り、サッカーを続けやすい環境を作ることも必要であろう。

インタビュー

私たちのチームでは、日本サッカー協会内にある日本女子サッカーリーグ (L.League)の竹内さんに以下の質問に答えていただき、直接話をしていただいた。なお、この対談はMDにて記録・保管されている。

質問事項：

- 普及活動としてどのようなことをしているのか？
- Lリーグの現状と展望について。(観客動員数、収支、どのようなメディア展開をしているのか・するのか、など)
- 広報活動のポイント(どのような層をターゲットとして集客しているのか？ 宣伝広告費はいくらくらい使っているのか？ など)
- 選手の生活(普段の生活、仕事をしながら選手をやっているのか？、練習環境、引退後の活動など)
- 企業のスポンサー離れについて(チーム運営費はどうするのか？ 新たな資金源はあるのか？)

欲しいデータ：

- 会計資料(広告費、運営費をいくらくらい使っているのかを知りたいので)
- TV放映は行っているのか？ また視聴率は？
- 全日本、Lリーグの観客動員数の推移
- 世界ランクの推移(ありますか？)

普及活動について。機関紙や年鑑をかつては出していたが、予算の関係上、いずれも今は出していない。ちなみに、機関紙の発行費用は500万円前後かかるとのこと。

Lリーグの現状について。事務局的にはLリーグの存続を主眼にしており、チームづくり的なことも考えて、「地域」との関係作りも活動方針の中にいれている。観客動員数、収支などは別紙の資料をいただいた。

広報活動について。ターゲットはサッカーをしている女の子と、サッカーを好きな人。前者に対しては見本となるように見てもらえると、後者に対してはサッカーの魅力をより理解してもらおう、という観点からのアプローチを行なっていきたいとのこと。キリンカップの前座の試合として女子の試合を行なうという構想もあるとのことだった。ただ、広告費が、今、捻出できないので、いつ試合をしているかなどの情報が提供できていないという問題もある。

選手の生活について。選手の生活については次のとおりで、田崎やYKKは選手は社員契約をしており、サッカー活動も含めての雇用関係となっている。他のチームの選手は、いわゆる「クラブ活動」で、他に仕事をもちながらサッカーをしている。そのため、仕事をする時間など、かなり時間的にきびしい場合もあるとのこと。また、選手によっては、日本だけでなく、海外のチームを視野に入れている選手もいるとのこと。

企業について。企業側としては女子サッカーに限らず、女子スポーツ、とくに団体スポーツに関しては、費用対効果の面からメリットがあまりないと考えている場合が多い。そういう企業に対し、費用対効果ではなく「メセナ」として、女子サッカーを文化として育てる、という観点から協賛してほしいという、とのこと。現状としては、なかなか、協賛金を出してくれないとのこと。ただ、現物支給で協力してくれる企業、たとえば、明星ゴムはボールを提供してくれたり、などのことはあるという。

会計資料に関しては、詳しくは、公開できないが、簡単に言うと、リーグ運営費としてLリーグとして約3000万円くらいが年間の予算となっているとのこと。

テレビ放映について。現在は全く行っていないとのこと。かつてしていたが、その時も視聴率などのデータはとっていないということだった。

全日本、Lリーグの観客動員・収支の推移について、また、世界ランキングはないのだが、オリンピック・ワールドカップについての資料を別紙にていただいた。

そのほか、インタビューを通して、わかったことを以下書いておく。

女子サッカーのチームは、ワールドカップの出場国からはんだんすると、世界で100チーム超で、ヨーロッパの各国はほとんど出場している。

プロ化についてはJリーグはサッカー協会の「統一契約書」ができているが、Lリーグの場合、アマチュアとそうでない選手の区別はできているが、プロというカテゴリーはまだできていないとのこと。

約1時間のインタビューに協力していただき、ありがとうございました。

日本女子サッカーリーグ(L.League) Japan Women's Football League(L.League)

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂 1-10-8 渋谷野村ビル 3F (財)日本サッカー協会内

TEL : 03-3476-0350/FAX : 03-3476-1021

コメント

- 「盛り上がる」と言うコトバの定義は「競技人口が増える」とことと「観客動員を増やす」とことと2つあると思うが、まずどちらに重点をおくかで変わってくるのでは？（館野さん）

「競技人口～」は女子サッカーの構造変化、「観客～」は の盛り上げ案で述べました。重点を置いているのは のほうです。理由は、女子サッカー字体の成熟なしに観客動員が増えることはあり得ないと考えたからです。

- 学校体育の枠組を越えて地域密着型の総合スポーツクラブが定着すれば、女子サッカーも盛り上がる可能性があるのではないのでしょうか？（下田さん）

地域密着型でうまくいくのはメジャースポーツだけだと思います。女子サッカーもクラブ主導で行なわれているが、練習に行くために2時間近く費やすなど、クラブがある程度数がないと地域密着型は機能しないと思います。

- 発表を聞いていて「女子サッカー」を他のマイナースポーツに置き換えてもそのまま通用するような気がした。「女子サッカー」に固有の問題はないのでしょうか？（田辺さん）

中学校の部活動によって競技人口の流出が起きているというのは女子サッカーに固有といえるのではないのでしょうか。

- Jリーグの前座試合というのは、とても良い案だと思います。女子サッカーチームの母体企業はなぜ女子サッカーをやっているのですか？Jリーグのチームが女子サッカーを行うというのも1つの案だと思います。（青山さん）

母体企業があるのは現在2チームのみです。Jリーグのチームが女子サッカーを行なうというのはいい案だと思うのですが、練習環境など考えた場合、男子にグラウンドを占有されてしまって練習できない、などの問題が出てきてしまう可能性もあると思います。

- ルールの変更というのはいいいアイデアですが、実現は可能なんですか？（真田さん）
- ルールの変更は日本国内だけでできるものではないと思います。世界で行なわれている女子サッカーなので、世界基準で考える必要があります。国際女子サッカー連盟といったようなものはあるのでしょうか？（森山さん）

可能です。過去に、女子のルールは男子と異なっていました。詳しくはを参照してください。また、女子の国際連盟はF I F Aの管轄下にありません。

- 前にもコメントしたのですが、アメリカでは男子サッカーよりも女子サッカーの方が断然人気があります。アメリカで女子サッカーが成功した理由を探ることで、それを日本にも適用できないものなのでしょうか？ルール変更に関し言えば、時間短縮以外に抜本的な変更はできないのでしょうか？（高橋さん）
- 中国の男子サッカーは日本より弱いかもしれませんが、女子サッカーは強いと思います。その原因を私も知りたいのです。（阮さん）

世界的にみて、国としてバックアップしていると考えられるチーム（中国など）や組織的に確立されているアメリカなどが強いと言えます。やはり、まずは競技人口の確保をし、女子サッカーの認知度を少しずつでも上げていくことが大切だと思います。そのためにも、プレーをしたい人達をうまくバックアップする体勢を整えることが必要でしょう。

- サッカー好きの女の子11人集めるのは大変だと思います(学校単位だと)、女子サッカーのLリーグは実業団チームが多いのですか？（加藤さん）

ルール変更のところでも述べた通り、人数を少なくしたり、フットサル部を作るなどの案を提案してみます。実業団チームについては少ないです。

- Lリーグを盛り上げる具体的な方策が示されていてよかったと思います。ただしそれが「アマチュアとして」とつながるかが疑問です。収入、所属企業との関係をもっと考えるべきだったと思います。（櫻井さん）

インタビューを通してわかったことで、収入はほとんどないに等しく、所属企業に関しても関係はほとんどない、という現状があり、そのことを前提にプレゼンテーションを行いました。

- **女の子がサッカーをするというのは、まだそれほどなじみがないため、盛り上げるのは難しい。盛り上げる必要とは？（山下さん）**

必要性というよりも、なぜこんなに盛り上がらないかということ疑問に思ったので、テーマとして取り上げました。そして、調べた結果、問題点が出てきたので、盛り上げるための方策を提案していこうということになりました。

- **女子サッカーというのは、もともと欧州や南米で女性がサッカーをするという習慣がないため定着が難しいと思われる。（北さん）**

ワールドカップの出場チームを見てもらえばわかると思うのですが、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなど北欧のチームはかなり強いですし、ブラジル、メキシコあたりの国も参加しています。

- **スポンサーの協力をあおがなくては、全てのスポーツはメジャーになりえない。そういった点で、女子サッカーにおいてもどうやってスポンサーを見つけてくるかが、鍵になってくると思う。（辻さん）**

スポンサーを見つけるためには商品自体に価値がなくてはいけない。女子サッカーに関して言えば、まだ、その段階に達しているとはいえないので、今回は「スポンサー」に関することは議論の対象からあえて外しました。今の段階で、どうスポンサーを獲得するか、について言及しても、あまり現実的ではないと考えたためです。

- **女子サッカーはオリンピック競技のもなっていますよね。しかし、その時の観客動員数もたいしたことがなかったそうです。やはり迫力とかに欠けるからではないでしょうか？スピード感に欠けますしね。女子サッカーの普及には、私としては、時間が必要だと思います。急速に人気上昇する要素がありません。覇気が必要だと感じています。（佐藤祐之さん）**

女子サッカーの観客動員数ですが、各試合で一万人以上、多いときには五万人以上はいつているので、「たいしたことがなかった」とは言えないと思います。たしかに男子と比べると少ないですが。普及に関しては、たしかに長期的なプランを立てることが必要だと考えたので、今回のレポートもそのようなことも含めて、まとめていきました。

- 静岡でも、学校（小中）で女子がサッカーをしている人は少ないし、体育でもなかなかやらない。土のグラウンドで、サッカーをすると、擦り傷とかができるから、それをいやがっている？（大野さん）

ケガについては、ルールの変更や、フットサルの導入などで、多少軽減できると思います。ちなみに、埼玉ですが、小学校のサッカー団に女子もいました。

感想・評価

瀬戸

女子スポーツの問題は世界的に起こっていることなので、他国のとの比較も重点を起きたかったが、アメリカ以外の資料がそろわなくて十分に検討することができなかった。また、女子スポーツを語る上で大事な女性の社会進出に伴う諸問題に対して、もう少し踏みこめただろう。全体的には具体性がありまとまったレポートができたと思う。

酒井

スポーツは基本的には楽しむものである。中にはそれが仕事になる人がいても、その根本には、その「スポーツが好き」という気持ちがあると思う。だから、女子の中にもサッカーの魅力に気づいて、サッカーを愛する人が増えていったらいいなと思う。

今回のレポートで、女子サッカーを取り上げてみたが、男子と女子の比較で、もっと具体的なデータが手に入れば、より深めることができたかもしれないというのは心残りではある。しかし、全体としては、フィールドワークなどもまじえたおかげもあり、具体性のある、また、建設的な提案の伴った良いレポートができたと思う。このレポートが女子サッカーの発展の一助となれば幸いである。

佐藤

スポーツ産業論の方ではバレーボールについてのことを調べたのだが、日本において、比較的「花形」的存在であったバレーボールも最近では「休部」「廃部」など衰退してきている。かつて人気のあったスポーツで

も、なかなか経営が難しい中、「女子スポーツ」というマーケットに新規参入してきたともいえる女子サッカーはどのような状況に置かれているのか、ということについて調べていくことは、とても興味深かった。個人的には、「女子スポーツ」については、拡大の可能性が高いマーケットであると思うので、今回のレポートが何らかの形で反映されることを期待したい。